教育再生と復興に協力

福島県立ふたば未来学園高と協定

専修大学と福島県立ふたば未来学園高等学校（福島県双葉郡広野町、丹野純一校長）は教育交流提携に関する協定を結び、4月19日、調印式を行った。東京電力福島第1原発事故で多くの住民が避難を強いられた福島県双葉郡の教育再生と地域復興に向け協力する。

同高は原発事故後、生徒数が減少した郡内の五つの県立高校を集約する形で2015年4月に開校。県内で初めて文部科学省のスーパーグローバルハイスクールに指定されるとともに、課題解決型学習など特色ある教育を進めている。

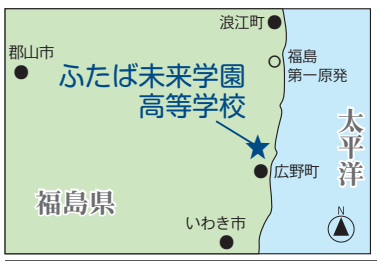
本学の教育交流提携は3校目。ふたば未来学園高が大学と協定を結ぶのは初めて。教育交流プログラムを実施するほか、2018年度入試から教育交流提携校推薦入試を実施する。

神田キャンパスで行われた調印式には、丹野校長、佐々木重人学長や学部長らが出席。丹野校長と佐々木学長が協定書を交換し、握手を交わした。

佐々木学長は『社会知性の開発』をビジョンに掲げる本学として、双葉郡や福島県域に対する社会貢献と教育再生を支援したいとの思いから、今回の協定に至った。今後末永く応援させていただきたい」とあいさつ。丹野校長は「これからの高校と大学の使命は、未来を創造する力をいかに子どもたちにつけていくか。専修大学との連携が開始できることは非常に意義がある」と歓迎した。

丹野校長は同高が進める課題解決型学習「ふるさと創造学」について説明。「困難な課題が山積する現実社会」をフィールドに、班に分かれて復興を超えた持続可能な地域づくりについて研究、地域再生の実践を行っている。今回の教育交流提携において、「大学の専門的知見や学生の知識が学びを深めるうえで重要」と専大の協力を期待した。佐々木学長も「最大限支援をすることでわれわれも成長したい」と応じた。

協定書を手に握手を交わす佐々木学長（左）と丹野校長



「文学部50年小史」を刊行

半世紀の軌跡振り返る

昨年創立50周年を迎えた文学部の歴史を振り返る記念小史＝写真＝が刊行された。

文学部は1966年に国文、英米文、人文の3学科でスタートした。2010年度、文学部改組により人間科学部が新設され、文学部に人文・ジャーナリズム学科が誕生するなど現在2学部9学科に発展した。その軌跡を通史編、学科史編、資料編の3パートに分けて掲載している。昨年度一年間にわたって開催した創立50周年記念企画の講演会の模様も巻頭カラーページなどで紹介している。

50年小史編纂委員会編集委員長の宇都榮子人間科学部教授は「今後60年、70年と未来に向けて歩む道を考える時、歴史を体系的に理解することが大切。ぜひひもといてほしい」と話している。

A4判127ページ。非売品。800部発行し関係者に配られた。

文学部50周年記念のホームページから、PDFファイルで閲覧できる。問い合わせは教務課文学部☎044・911・1254

50年を振り返る座談会の出席者。その模様も掲載した＝2016年9月

「道の駅」と就労体験協定

本学は全国「道の駅」連絡会と就労体験型実習（インターンシップ）の基本協定を締結した。締結日は4月25日。

全国各地にある「道の駅」を学生の就労体験の場として提供。地域の魅力が集まる「道の駅」と大学生が交流することで新たな価値の創造を図る。

就労体験を受け入れている施設は北海道から九州まで189カ所。期間や業務内容、費用負担は施設ごとに異なる。問い合わせ、申し込みはキャリアデザインセンター事務課へ。申し込み締め切りは5月22日（月）。

「大学史紀要第9号」発刊

矢野前学長の最後の講義も

『専修大学史紀要第9号』＝写真＝が発刊された。本学大学史資料課編。

昨年4月に急逝された矢野建一前学長の最後の講義を採録した。矢野前学長は亡くなる1週間前に新領域科目301「専修大学の歴史」を担当。「歴史を『かがみ』に」と題して、戦後、専修大学総長を務めた今村力三郎を取り上げ、業績や専修大学の歴史を分かりやすく語った。

また、日高義博理事長の講演録「日本人の人権意識」を収めたほか、創立140周年記念事業として昨年開催された「目賀田種太郎と近代日本」展、今村力三郎生誕150年記念展の模様を写真で紹介している。

希望者は大学史資料課☎03・3265・5879

ハラスメントのないキャンパスへ

『ハラスメントのないキャンパスへ』というリーフレットを読んだことはありますか？

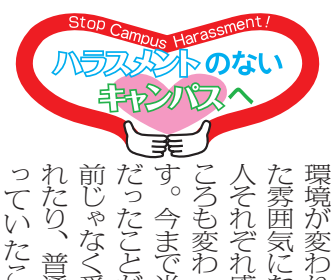
このリーフレットには、「キャンパス・ハラスメントとは」どういうことをいうのか、「キャンパス・ハラスメント相談の流れ」や「加害者にならないためには」などについて、わかりやすく書かれています。どれも専修大学の構成員である学生、教員、職員の誰もが快適に学んだり、研究したり、働いたりしていける場にしていく上で、みなさんに知っていただきたい内容です。

今年も4月には、多くの学生、教職員を専修大学に迎え入れました。環境が変わり、違った雰囲気になると、人それぞれ感じるところも変わってきます。今まで当たり前だったことが当たり前じゃなく受け取られたり、普通だと思っていたことが受け入れられなかったりすることもあるでしょう。めげたり、しょげたりする時もあるかもしれませんが、知らなかったことで他人を傷つけてしまうことにならないようにしたいですね。

自分に何かあった時または友人達に何かあった時は、キャンパス・ハラスメント対策室に相談してください。リーフレットに連絡先が載っています。

快適な専修大学LIFEを送るために、読んだことがある人もない人もリーフレットに目を通して、ハラスメントのない大学を目指していきましょう。

（キャンパス・ハラスメント対策室員・杉山　千鶴）



学位取得

高橋龍夫文学部教授＝写真＝が3月24日付で総合研究大学院大学から博士（文学）の学位を授与された。学位論文名は「芥川龍之介文学におけるモダニズムの諸相」。

2018入学ガイドを配布

本学の学びの特徴や学部学科の特色、キャンパス情報、就職をはじめとした支援体制、入試情報などを紹介する「2018入学ガイド」＝写真＝を5月下旬から配布します。ご希望の方は入学センターインフォメーションまでお問い合わせください。専修大学ホームページからも申し込みできます。

【神田キャンパス】☎03・3265・6677

【生田キャンパス】☎044・911・0794

【専修大学ホームページ】http://www.senshu-u.ac.jp/admiss_info/databook.html

専修人の新しい本

総合商社

――その「強さ」と、日本企業の「次」を探る

田中隆之著

総合商社は、日本独自の業態として戦後復興期や高度成長期の日本経済を牽引し、オイルショック、バブル崩壊、リーマンショックなどの苦難を乗り越えて隆盛を誇っている。そのユニークさはますます強まり、もはや諸外国の追随を許さない。本書は、その「強さ」に迫り、日本企業の「次」を探る。

「総合商社とは何か」「なぜ日本にだけ存在するのか」という古くて新しい問いを再考し、2000年代以降の「投資会社化」の内実や「今後も存続するのか」「どこへ向かうか」を明らかにしていく。

総合商社が今世紀はじめに復活を遂げるにあたって行った経営改革とビジネスモデルの変革は、多くの日本企業に〝気づき〟を与えるだろう。

（祥伝社新書・本体820円＋税）

著者（たなか・たかゆき）＝経済学部教授。主な担当は、財政金融政策、日本経済論。

アベノミクスと日本経済のゆくえ

中野英夫編著

本書は、昨年5月から6月にかけて行われた経済学部経済学科公開講座「4年目を迎えたアベノミクスと日本経済」を書籍として再構成したものである。

現在の日本経済が抱える問題と安倍政権の経済政策であるアベノミクスについて、財政、金融、労働、社会保障、産業、マクロ経済などの幅広い分野にわたって掘り下げて論じている。

各章は経済学部経済学科の6教員が執筆。広く一般に向けた平易な表現と内容になっており、日本経済の今後の方向性を考える指針として社会人にも薦められる一冊である。

著者はほかに、高橋祐吉、田中隆之、櫻井宏二郎（以上、経済学部教授）、鈴木奈穂美（経済学部准教授）、西岡幸一（元経済学部教授・ローム取締役。（専修大学出版局・本体1700円＋税）。

編著者（なかの・ひでお）＝経済学部教授。主な担当は、財政学。